普及活動情勢報告（令和元年 12 月分）

中央西農業振興センター高知農業改良普及所

「集落活動センター梅の木」が開所　～今後、集落営農法人との連携も検討～

地域の老若男女が集まり開所

12 月 1 日、高知市鏡梅ノ木地域において、「集落活動センター梅の木」が開所しました。

これまで、地域住民と市・地域本部・普及所が、ワークショップや話し合いを行い、集落活動センターについて検討してきました。その結果、集落活動センターで取り組む 4 つの柱（集い、集落維持、暮らし、創る）と、その具体的内容が決まりました。その中では、農産物加工や共同栽培等についても取り組む予定となっています。

これから、集落活動センターと集落営農組織「農事組合法人梅ノ木ファーム」の連携が重要になっており、普及所は、関係機関と協力して活動の支援を行います。

「農福連携」春野キュウリ見学会を開催

見学前に、ビデオで作業工程を説明

12 月 10 日、高知市農福連携研究会の主催で、春野キュウリ見学会を開催しました。9 福祉サービス事業所から 21 名（職員 11 名、施設利用者 10 名）が参加し、普及所と JA から事前説明の後、出荷場と農家のハウスをそれぞれ 1 時間ずつ見学しました。

参加者からは、作業時間帯や春以降、暑い時間における作業状況の確認、休憩の取り方など多くの質問が出されました。受入れ側も状況に応じた柔軟な対応に心掛けるなど、活発な意見交換があり有意義な見学会となりました。

次は 1 月 28 日に出荷場体験会を計画しており、就労に向け段階を踏みながら支援していきます。

農家と福祉サービス事業所をマッチング

農家と福祉事業所を引き合わせて、事前打ち合わせ

高知市三里でラッカセイの脱莢作業を、福祉サービス事業所に委託するマッチングを行いました。農業会議の事業を活用し、2 福祉サービス事業所が 11～12 月に 3 回、試行就労することになりました。作業には延べ 16 人（指導者 7 人、施設利用者 9 人）が携わり、農福ともに満足され、その後も続けて作業を行う事になりました。

農家からは「福祉に委託できる目処が付いたので、来作はもっと栽培面積を広げたい。」という感想を得られた他、他の農家から「うちもお願いしたい。」と新たな契約も結ばれました。

この取り組みは普及所が事務局を務める「高知市農福連携研究会」の成果事例として、周りの農家にも広報し、農福連携の波及を図っていきます。

‘よさ恋美人’の安定生産に向けて　～ＪＡ高知市稲作部年末研修会～

研修会の様子

12 月 9 日、ドリーマーベイシャトーにて、ＪＡ高知市稲作部会の年末研修会が開催され、51 名が参加しました。普及所からは、今年度の‘よさ恋美人’等の実証試験の結果を報告し、品種に適した栽培方法を情報提供しました。環境農業推進課からは「‘よさ恋美人’成績検討会」の高知市の生産者の結果について報告がありました。生産者からは、‘よさ恋美人’の休眠性や施肥量についての質問や、農薬の低価格化の要望等がありました。

普及所では、今後も‘よさ恋美人’の生産推進に取り組んでいきます。

ウメの整枝・せん定技術の向上

ウメのせん定の様子

12 月 10 日高知市鏡で、JA 高知市鏡支所果樹部会のウメせん定講習会が開かれ、部会員、営農指導員ら 15 名が参加しました。

普及所からは、「枝の日当たりを考慮し、車枝や徒長枝は切る。横枝は残し、結果枝にする。」について整枝・せん定を実演しながら説明しました。また、今後の栽培注意点についても、情報提供しました。部会員は、各々がせん定を実践したり、日頃の栽培への疑問点などの意見交換をしました。

普及所では、同部会でのユズのせん定講習会等で指導し、果樹の栽培技術の向上を目指していきます。

ミョウガの研修会が開催されました

熱心に聞き入る参加者

12 月 20 日 JA 高知市大津支所 2 階会議室にて、JA 高知市茗荷研究会の総会と研修会が開催され、組合員 14 名が参加しました。

研修会では、普及所から新系統比較試験実証ほの中間報告、これからの栽培管理、ミョウガに発生する病害虫について情報提供しました。参加者からは「立枯症と根茎腐敗病の症状の違いは？」などの質問があり、活発な意見交換が行われました。

今後も普及所は、生産者や JA などと連携し課題解決に向け支援をしていきます。

キュウリにおける環境制御現地検討会　～自作制御機器を紹介～

環境制御機器について意見交換

12 月 20 日、高知市春野町のキュウリ現地圃場で環境制御現地検討会が開催され、生産者 3 名が参加しました。

営農指導員から現地圃場の生育状況、環境データの説明があり、生産者間で環境データを比較することで、栽培管理の改善点が明らかとなりました。普及所からは「自分で作る環境制御機器」について情報提供したところ、生産者から興味があるとの意見があり、今後は制作に向けた勉強会等についても計画していくこととなりました。

普及所は、産地全体への環境制御による増収効果の拡大を目指し、JA と連携して支援を行っていきます。